

幽霊たちのやり方

Ambrose Bierce, "The Ways of Ghosts"

翻訳：川村真央

首つりにて

アイオワ州レバノン近郊に住むダニエル・ベイカーという年老いた男は、近所の人々から疑われていた。彼の家でその晩過ごすという約束を取り付けていた行商人を殺害したという疑いだった。これは一八五三年のこと、西部では今よりも行商が盛んで、かなりの危険が伴う頃のことだった。この行商人は、荷物を持って、たった一人で旅してまわっており、人々のもてなしを当てにしなくてはならなかった。おかげで彼は奇妙な人たちとも関わることになり、そのなかには、まるつきり実直な生活を送っているとは言えない人たちもいた。生活のためなら、殺人だって許容できるという人たちだ。荷物が減って、代わりに財布が膨らんでいる行商人の行った先は、荒くれ者が一人で住んでいる家まで辿ることが出来るが、その先は決して辿れない、というのが時折起こることだった。「年寄りのベイカー」―いつも彼はこう呼ばれていたのだが―の場合もそうだった。(このような呼び名は、西部「開拓地」では敬われていない年長者にだけつけられるものだった。年齢を特に悪く言うというのは、社会のみ出し者だという悪評に総じて付いてくるものだった。) 彼の家に、行商人が一人やってきて、出ていったものは誰もいなかった。これが、みんなが知っている話だった。

七年後、その地方で有名なバプテスト派のカミング牧師がある夜、ベイカーの農園の近くを馬車で通りかかった。夜の闇はそれほど深くなかった。あたりを覆う、ふわりとした霧のベールの上のどこかには、月が出ていたのだ。カミング牧師は、いつでも陽気な人だったのだが、口笛を吹いていた。時折、その合間に、親しげに馬を励ます言葉をかけていた。干上がった峡谷にかかる小さな橋に差し掛かった時、橋の上に立つ男の姿が見えた。霧のかかった森の灰色を背にして、姿かたちがはっきりと分かった。その男は背中になにかをひもでくくりつけ、重そうな杖を携えていた。明らかに旅の行商人だった。この男はぼんやりとした様子で、夢遊病のような感じだった。カミング牧師は、彼の目の前まで来ると、手綱を引いて馬を止め、愛想よく挨拶し、馬車に乗りませんかと誘った。「もし、私と行く先が同じでしたら。」そう付け加えた。男は顔を上げ、彼をまじまじと見つめたが、答えもしなければ、それ以上動くこともなかった。牧師は、親切に根気強く、もう一度誘った。それに対して男は、脇にあった右手を前にぱつと伸ばし、橋の一番端、自分の立っているところの下を指さした。牧師は男を通り越して、峡谷を覗き込んだが、おかしなものは何も見えず、男にそれを言おうと視線を引き戻した。男は消えてしまっていた。馬は、この間中ずっとかなり落ち着きを失っていたのだが、その瞬間に恐怖で鼻を鳴らし、走り出し始めた。彼が再び馬を御すまでに、そこから百ヤードほど進んで丘の頂にまで来ていた。振り返ると、最初に見た時と同じ場所に、同じ様子の男の姿が再び見えた。その時、はじめて彼は不気味な感じを覚え

て、はやる馬が走れるだけ急いで家へと帰った。

家に着くと、家族にこの出来事を話して聞かせ、明朝早くに近所のジョン・ホワイト・コーウェルと、アブナー・レイザーを伴ってその場所に戻った。彼らは橋の梁の一つ、幽霊が立っていた場所のちょうど真下に、首を吊っている年寄りのベイカーの遺体を発見した。霧でわずかに湿った、分厚い塵が橋を覆っていたが、唯一残っていたのは、カミング牧師の馬の足跡だけだった。遺体を下すにあたって、男たちは緩んだ、もろい斜面に苦労したが、この斜面から、水と霧の作用でほとんど白骨化した人骨があらわになった。これは失踪した行商人ものと鑑定された。二体の審問検死では、検死陪審がダニエル・ベイカーは一時精神異常で自殺したということ、サミュエル・モーリッツは陪審員が知らない第三者によって殺されたということを明らかにした。

そっけない挨拶

これはサンフランシスコの、故ベンソン・フォーリーによって語られた話だ。

「一八八一年の夏、私はジームズ・H・コンウェイという名の男に出会った。テネシー州のフランクリンの住民だった。彼は健康のためにサンフランシスコを訪れていて、気分は落ち込んでいた。そしてロレンス・バーティング氏からの紹介状を私のところへ持ってきたのだ。バーティングとは、彼が南北戦争中に北軍大尉だったところに知り合っていた。戦争が終わると彼はフランクリンに腰を落ち着け、そのうちに、私には妥当だと思われたが、弁護士として著名になった。バーティングは、いつだって立派で、信頼に足る人物のように思われたし、彼がコンウェイ氏のために書いてやったメモで示している温かな友情は、その手紙が、どこからどう見ても信頼と尊敬に値するものだという十分な証拠となった。ある日、夕食の時、コンウェイは私にこう言った。先に死んだ方が、可能なら、墓の向こうから間違えようのない方法で―その方法は（賢くも、と私には思われたのだが）その時の状況しだい、先に死んだほうが決めることにしていた―相手に語りかける、というのが自分とバーティングとの間で、大真面目に取り決めたことなのだ。

コンウェイ氏が取り決めについて話してくれたこの会話から数週間後のある日、私はモングメリ通をゆっくりと歩いている彼に出くわした。ぼんやりした感じから察するに、明らかに深い物思いに沈んでいたのだろう。彼は、頭をただ動かしただけで、そっけなく挨拶すると、立ち去ってしまったのだ。握手をしようとして手を差し出しかけ、驚き、当然いくらか腹を立てて道端に立っている私を残して。その次の日、私はパレス・ホテルの事務所でまた彼に出くわした。前日の不愉快な振舞いを繰り返そうとしているのを見て、戸口のところで、親し気に挨拶をして彼を遮り、率直に彼の態度が変わってしまったことについての説明を求めた。彼は一瞬ためらったが、私の目をしっかりと見つめてこう言った。

『フォーリーさん、私にはもうあなたからの友情をもう権利がないと思っんです。バー

テイニングさんが、何故かは分かりませんが、私への友情を引っ込めてしまったと思われるからです。彼がまだあなたに知らせていないというのなら、おそらくこれから知らせるつもりなのでしょう。』

『でも、バーテイニングさんからは何の便りも受け取っていないんですよ。』と答えた

『彼からの便りですって！』彼は驚いてみせて、そう繰り返した。『おやおや。彼はこの町にいますよ。昨日、あなたと会う十分前に彼に会ったんですからね。彼が私にしたのと全く同じように、あなたに挨拶したわけなんです。それにまた会ったんです、まだ十五分も経っていませんがね。全く同じ様子でした。会釈して通り過ぎただけなんです。あなたが示してくれた礼儀を、すぐに忘れてしまうというわけにもいきませんね。おはようございます。それかーその方が都合がよければーそれでは、これで。』

私にしてみれば、これは単にコンウェイ氏が考えすぎで、気にしすぎているだけだと思われた。

演劇的な状況や文学的効果は、私にはなじみのないもので、すぐに明かしてしまうが、バーテイニング氏は死んでいたのだ。この会話の四日前に、ナッシュビルで彼は死んでしまっていた。コンウェイ氏を訪ね、我々の友人の死を知らせる手紙を見せて、それを告げた。すると彼は、本当は知っていたんじゃないかと疑う余地もないほど、明らかに動揺していた。

『信じられないようなことですね。』しばらく物思いに沈んでから彼はそう言った。『誰か違う人をバーテイニングだと思ってしまったに違いありませんね。そしてあの男のそっけない挨拶は、見知らぬ私の挨拶に対して、礼儀正しく返してくれたただけだったに違いありません。確かに、思い出してみると、あの人にはバーテイニングの口髭がありませんでしたよ。』  
『別の人だったんでしょうね、間違いないですよ。』と同意すると、その後、私たちの間で、これが再び話題に上ることはなかった。しかし、私はポケットの中にバーテイニングの写真を持っていた。彼の妻からの手紙に同封されていたのだ。これは彼の死の一週間前に撮られたもので、口髭がなかった。』

### 無線のメッセージ

一八九六年の夏、シカゴに工場を持つ裕福なウィリアム・ホルルト氏は、ニューヨーク中心部にある小さな町に住んでいた。誰の記憶にも残っていない作家の名前を冠した町だ。ホルルト氏は、「妻との間に問題があり」、一年前から別居していた。この問題というのが「性格の相容れなさ」よりも、さらに深刻な問題かどうかを知っているのは、おそらく生きている人間の中で彼だけだろう。秘密という悪徳に溺れているわけではなかった。しかしここに書き留める出来事については、内密にするという誓いを課さなければ、誰にも話して聞かせることはなかった。今はヨーロッパに住んでいる。

ある日の夕暮れ、身を寄せている兄の家から、田舎道をぶらぶら散歩しようと思っただけで出かけた。

きつとこうだと思われるかもしれない―起きたと言われていることに関して、きつとこうだったのだと考えることにどんな価値があるとしても―きつと彼は家庭内の不幸や、自分の人生における悲惨な変化のことを考えて、頭がいつぱいになっていたのでろうと。彼が考えていたことが何だったとしても、時間の経過にも、自分の足がどこへ向かっているのにも、気が付かないほどに頭がいつぱいになっていた。自分の町を出てから、かなり遠くへ来ているということと、町を出た道とは全く似ていない、わびしい道を歩いているということしか認識していなかった。つまりは、「迷った」ということだった。

自分の不運に気づいて、彼は微笑んだ。ニューヨーク中心部は危険な地区ではなかったし、長いこと道に迷ったままということもないからだ。彼は踵を返して、来た道を戻った。そんなに行かないうちに、景色がはつきりしてきた―もつと明るくなってきたのに気付いた。あたり一面が柔らかな、赤い明かりでいつぱいになっており、自分の影が、目の前の道に伸びているのが見えた。「月が昇ってきたんだな。」彼はそうつぶやいた。それから、そろそろ新月の時期だったこと、そしてこの厄介な球体が、もし見えない時期なら、ずいぶん前に沈んでしまっているはずだということを思い出した。彼は立ち止まって、あたりを見回し、急にあたりを照らし出した明かりの源を探した。そうしている時にも、彼の影は回転して、前と同じく目の前の道路に伸びていた。明かりは、まだ後ろから差ってきているのだ。これは驚くべきことだった。わけがわからなかった。もう一度、向きを変えてみた。そしてもう一度ぐるりとまわってあらゆる方向を向いた。影は常に前にあった―常に明かりは後ろにあった。「静かな、ぞつとする赤色」の明かりが。

ホールトは驚愕した―「啞然とする」というのが、この状態を表す時に彼がよく使う言葉だった―が、知的好奇心を失ってはいないようだった。種類や源を特定できないこの明かりの明るさをはかろうと、腕時計を取り出し、文字盤の数字を読めるかどうかを見てみた。数字ははつきりと見え、時計の針は十一時二十五分を指していた。その瞬間、突然、不思議な光がぼつと光った。目もくらむような輝きで、空全体が光ると、星明かりもかき消え、彼自身の不気味な影が、あたりを横切った。この世のものとも思えぬ光に照らされて、近くに、だが、明らかに空中で、かなりの高さのところに、夜着に身を包み、胸のところに子供を抱えた妻の姿が見えた。彼女の目は、彼をじつと見つめていた。後から定義したり描写したりすることのできない表情だった。「この世のものでない」というだけでは言い尽くせないような。

この光は一瞬のもので、あとには真つ暗闇が続いた。しかし幽霊は白く、動かない状態で見えていた。それからほんの少しづつ、おぼろげになっていって、消えてしまった。まるで臉に焼き付いた残像のように。この幽霊の特徴は、この時にはほとんど言い表せなかったが、後から思い出すと、女性の上半身だけしか見えていないということだった。腰から下は何も見えなかったのだ。

突然の暗闇は、絶対的なものではなく、相対的なものだった。周りにあるものが次第に見えるようになったからだ。

明け方、ホールトは自分が出かけた方とは反対側から、自分の町に入ろうとしていることに気づいた。まもなく兄の家に着いたが、兄は自分の弟だと分からなかった。狂気じみた目つきをして、げっそりとして、ネズミのように灰色だったからだ。彼は、ほとんど支離滅裂に、この夜の経験を話して聞かせた。

「横になるんだよ、気の毒に。そしてー待つんだ。話を聞くのはそれからだ。」そう兄は言った。

一時間後、来る運命だった電報が届いた。シカゴ近郊にあったホールトの住まいが、火事で焼け落ちてしまったのだ。炎で逃げ道を絶たれ、彼の妻は最上階の窓辺に、子供を抱いて姿を見せた。その場所で、彼女はじっと動かず、どうやら呆然としていたようだった。梯子で消防士が到着したちようどその時に、床がぐずれてしまい、彼女の姿はもはや見えなくなってしまった。

恐怖が最高潮に達したこの瞬間が、標準時で十一時二十五分だった。

## 逮捕

義理の弟を殺してしまった後、ケンタツキー州のオーリン・ブラウワーは裁判から逃亡した。裁判を待つ間、看守を鉄棒で殴って鍵を奪い、外扉を開け、夜の闇に踏み出して、拘留されていた郡刑務所から逃亡したのだった。看守は丸腰で、ブラウワーは取り戻した自由を守るための武器を一つも持っていなかった。町を出るとすぐに、彼は愚かにも森へと足を踏み入れた。これは何年も前の話で、当時この地域は今よりも拓けていなかったのだ。

その夜は、月も星も出ていなくて、かなり暗く、ブラウワーはこれまで一度もそのあたりを歩き回ったことがなく、この土地の地形も全く知らなかったので、当然のことながら、それほど経たないうちに、道に迷ってしまった。町から離れていっているのか、それとも町へ戻っていつているのかーオーリン・ブラウワーにとっては一番重要な問題だったがーそれも分からなかった。どちらにしてもブラッドハウンドの群れを連れた市民保安隊がすぐに後を追ってくるだろうと言うことも、逃げられる可能性が乏しいことも分かっていた。しかし自分自身の追跡を援助したくはなかった。もう一時間の自由だけでも、得る価値があった。にわかには森から旧道へと出るとそこには、目の前に、暗がりの中じつと立っている男の姿が、ぼんやりと見えた。引き返すにはもう遅かった。この逃亡者は、相手が少しでも動いたら森の方へ戻ろうと思った。後から彼が「鹿弾をたくさん浴びせられたかのように」と説明したように戻ろうと思ったのだ。だから両者は木のように、そこに立っていた。ブラウワーは自分の心臓の動きに息も止まりそうだった。他方はー他方の感情は記録されていない。

一瞬の後ー一時間にも思われたがー月の光が雲の切れ間から差し込み、追われている男は律法の化身が腕を上げ、自分の方、自分のさらに奥を指すのを見た。彼には分かった。捕縛者の方へ背を向けると、右も左も見ることなく、指示された方へと従順に歩いて行った。

ほとんど息もせず、鹿弾のお告げで、頭と背中が実際に痛んでいた。

ブラウワーは勇敢な罪人で、絞首刑になるまで生きた。それは、彼が義理の弟を冷酷に殺した、おぞましい個人的危機の状況からも分かる。ここでその話をする必要はない。この話は裁判中に明らかになったからだ。それを前にして彼が見せた冷静さは、絞首刑から彼を救いかけた。しかし、どうするのだろうか――勇敢な男が打ち負かされたとき、彼は従うのだ。

こうして彼らは、旧道に沿って森を抜け、刑務所への道をたどった。一度だけ、ブラウワーは思い切って、振り返った。たった一度だけ、自分が暗がりについて、他方が月明かりに照らされていると分かっている時にだけ、後ろを振り向いた。捕縛者はバートン・ダフと言い、死と同じくらい白く、眉の上には鉄棒の鉛色の痕があった。オーリン・ブラウワーは、それ以上興味を惹かれることはなかった。

ついに町へと入った。町全体が明るく照らされていたけれども、閑散としていた。女子供だけが残っていて、彼らはみな通りから離れていた。この罪人は刑務所に向かって真つすぐに向かっていた。正面玄関までまっすぐ歩いていき、重たい鉄の扉のノブに手をかけると、命令もされずに押し開けて中に入り、武装した六人の男に囲まれていることに気づいた。そして彼は振り返った。他には誰も入ってこなかった。

廊下にあるテーブルの上には、バートン・ダフの死体が横たえてあった。